

【論 説】

Communicative Competence 再考*

—— 英語教育との関連をめぐって ——

船 津 好 平

I. はじめに

Communicative Competence という用語が登場しはじめたのは1967年あたりで、ethnologists, sociolinguists, psycholinguists の間で用いられるようになったが、応用言語学、外国語としての英語教育の分野でも注目されはじめたのは Dell Hymes の“On Communicative Competence” (1971) が公にされてからであろう。

N. Chomsky の変形生成理論の英語教育への応用性に一定の限界のあることを知った英語教育の関係者達は Communicative Competence (以下 CC と略) を養う英語教育のあり方を志向しはじめたのである。1970年代の言語教育の分野には、まさに Communicative Approach 旋風が起り、その勢いは1980年代に入ってから決して衰えてはいないのである。それは M. Canale と M. Swain によるきわめて exhaustive な論文“*Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing*” (1980)、W. Littlewood の *Communicative Language Teaching* (1981)、J. C. Richards と R. W. Schmidt 編著の *Language and Communication* (1983) 等によって象徴されている。このように CC と言語教育の関連はますます重要視されてきている。

かかる認識の上に立って、本稿では CC の本質的な意味を再考し、それが言語教育、とくに外国語としての英語教育に如何なる示唆を与えるかを考察してみる。

*本稿は1983年2月26日開催された日本英語教育学会北海道支部及び日本大学英語教育学会北海道地区研究会による故北市陽一教授（北海道大学）追悼合同研究

会で口頭発表した「英語学習における Communicative Competence の意義について」に加筆、修正を施し、改題したものである。

II. CC の定義

CC の概念規定は社会言語学者、心理言語学者、応用言語学者の間で必ずしも一定してはいないようである。まず社会言語学の立場を代表する Dell Hymes (1971) による定義は “A knowledge of the rules for understanding and producing both the referential and the social meaning of language.” となっている。これは社会の言語環境の中で指示的な意味と社会的な意味を区別しながら言語を使用する規則についての知識（能力）に重点が置かれている定義である。

次に心理言語学者 L. A. Jakobovits の影響を受けた Sandra J. Savignon (1972) によると “The ability to function in a truly communicative setting — that is, in a dynamic exchange in which linguistic competence must adapt itself to the total informational input, both linguistic and paralinguistic, of one or more interlocutors.” と定義されている。ここでは Linguistic Competence と情報入力を結びつける対話者間のダイナミックな交流の機能を果す能力に力点が置かれているように思われる。

応用言語学者や外国語教育の専門家の間では W. Rivers (1973) のように CC を簡単に “spontaneous expression” と同一視したり、C. B. Paulston & M. N. Bruder (1976) のように “the ability to carry out linguistic interaction in the target language” とか E. D. Allen (1975) のように “The ability to converse or correspond with another person in a real-life situation.” といった外国語教育との係わりで認識されている。

これらの定義の中で Hymes (1971) が広く応用言語学者や外国語教育の専門家達に注目され、communicative approach 旋風の目となったのである。Hymes のこの定義は N. Chomsky (1965) の linguistic competence vs. linguistic performance の dichotomy に疑問を投げかける Chomsky 批判に根拠をおくものである。Hymes は「人間は社会的言語

環境の中でまず CC を獲得し、次に linguistic competence を内面化して行く」という考え方を打ち出したのである。彼は “There are rules of use without which the rules of grammar would be useless.” と述べ、Chomsky のいう linguistic competence (以下 LC と略) は language use の rules つまり CC が付随しはじめて意味をなすと主張、LC は CC の中に包含されることを示唆した。Hymes は Chomsky (1965) の “Linguistic theory is concerned primarily with an ideal speaker-listener, in a completely homogeneous speech community…” という箇所を取り上げ、現実社会には完全な homogeneous speech community など存在し得ないことを指摘、幼児、児童はむしろ heterogeneous speech community の中で言語能力を獲得して行くので、彼らの社会生活、つまり彼らの生活環境が様々な形で彼らの competence の発達に影響を与えるのであると述べている。

“In short, there is here differential competence within a heterogeneous speech community, both undoubtedly shaped by acculturation. Social life has affected not merely outward performance, but inner competence itself.” — p. 227 (1972年版による)。

そして Hymes (1971) の核心部分になるのが次の箇所である。

“We have then to account for the fact that a normal child acquires knowledge of sentences, not only as grammatical, but also as appropriate. He or she acquires competence as to when to speak, when not, and as to what to talk about with whom, when, where, in what manner.” —p. 277 (ibid) .

このように述べて、Hymes は、正常な子供は文法的な文ばかりでなく、それが適切な、つまり context にふさわしい文であるかどうかを知覚する知識を獲得する事実を説明しなければならないと主張する。文あるいは発話が誰によって、何時、何処で、何について、どのようになされて

いるかについて知ることのできる能力を正常な子供は獲得しているのだというのである。Hymes がいう CC とはまさにこの能力を指しているのである。

このような Hymes の CC についての概念規定は言語教育、とくに外国語教育のあり方に有力な理論的根拠を与えることになったと言えるであろう。これまで述べてきた CC の定義を総合し英語教育との関連から定義を試みると、CC とは「話し手と聞き手が互いに具体的な社会生活の場面で主として音声言語としての英語を用いて即座に意思の伝達を可能にする能力」であると言うことができよう。

III. CC と Pragmatics

Hymes は、正常な子供は発話が誰によって何時、何処で、何について、どのようになされるかについての知識（能力）を獲得して行く事実を指摘、これこそが CC であるとその概念規定をしたが、発話が誰によって、何時、何処で、何について、どのようになされるかという問題は Speech Acts (言語行為) と呼ばれ、Pragmatics (語用論) という領域で扱われる。従って CC は pragmatics と深い係わりをもち pragmatics をその理論的背景としていると言えよう。

Pragmatics は Charles S. Morris (1938) の Semiotics (記号論) に由来する。Morris は semiotics の下位範疇として(1) Syntax, (2) Semantics, (3) Pragmatics を設定している。彼によるとこれら三つの領域はそれぞれ次のように理解される。Syntax は純粹に記号と記号、つまり言語表現と言語表現の間の関係を扱う領域で抽象度が高い。Semantics はある記号とその記号が直接指示する事物との関係を扱う領域であり、すなわちある言語表現とその言語表現が指し示めす直接的な意味を扱い、その言語表現が誰によって、何時、何処で、どのようにして用いられるかの問題には一切係らないのである。しかしながら、pragmatics は記号、つまり言語表現とその言語表現を使用する者との関係を扱う領域であり、その言語表現が誰によって、何時、何処で、どのようにして用いられるかを明らかにする領域である。これら semiotics の三つの領域の関係を一つの例文を用いて説明してみよう。

Can you swim?

上の英文は syntax の立場からは You can swim. の文が変形されて疑問文になったものと説明され、semantics の立場からは聞き手に「あなたは泳ぐことができますか。」と泳ぐ能力を問う直接的な意味を表わす質問の文であると説明される。しかし pragmatics の立場からは間接的な意味で要請文あるいはさらに強く命令文としての機能を果たす、と説明されるのである。つまりこの Can you swim? という発話が、プールサイドにいる水泳コーチによって水泳の訓練を受けている生徒に向うて発せられた場合は「さあ、飛びこめ。」という意味として了解されるのである。ここで pragmatics の領域は言語表現とそれをを用いる人間の間の関係、そして場面、脈絡が密接に係わっていることが明瞭である。Carol A. Kates(1980) は pragmatics を、Morris の定義を発展させて、the study of the ways in which people use signs to perform various communicative function と定義しているが、まさに pragmatics の内実を示めず的確な定義である。

我々人間の言語行為 (Speech Acts) はこのように発話とそれを使用する人間、そして場面、脈絡に係わるものであるが、この言語行為を言語哲学者 J. L. Austin (1962) は次のように分類している。

- (1) Locutionary act (an act of saying something)
- (2) Illocutionary act (an act of doing something in saying something)
- (3) Perlocutionary act (an act of causing some effect because of doing something in saying something)

これらの中で言語教育研究者達が最も関心を寄せているのが Illocutionary acts (発語内行為) である。なぜなら、それは statement, assertion, suggestion, order, request, proposal, warning, promise, apology, greeting 等言語行為の大部分を占めているからである。二・三例を挙げてみよう。

- (1) A : Do you have the time?
B : It's five thirty.
- (2) A : It's half past six.
B : Sorry, I'm late.
- (3) Would you speak more slowly please?

(1)の場合の A の発話は単なる質問ではなく要請 (request) を表わし、B は許可 (grant) を表わす illocutionary act となる。(2)の場合の A の発話には intonation や表情による context が与えられて不満 (complaint) を表わし、B は謝罪 (apology) を表わす illocutionary act となる。(3)の場合、授業中生徒が教師に向って発話するという social context の中では request—assertion (You speak too fast.)—reporting (It is very difficult) という illocutionary act になるのである。このような speech acts の研究が近年応用言語学者の間で広く取りあげられ外国語としての英語教育の領域にも様々な形で採用されはじめている。たとえば、ethnologist である E. Goffman (1971) が“Excuse me.”と“I’m sorry.”は社会規範 (social norm) を自覚的あるいは無自覚的に破った場合、あるいは破ろうとしている場合、相手の感情を和らげる働きとなるいわゆる remedial interchange の initial step としての remedy であるとしているが、この Goffman の考え方に批判、修正を試みた A. Borkin and S. M. Reinhart (1978) は興味深く有益である。

(1) I’m sorry, but it is the time to finish.

(2) A : I don’t know if you’ve heard or not, but I didn’t get my Rackham Grant.

B : Oh, I didn’t know. I’m sorry.

Borkin and Reinhart によると、(1)の場合、もしこの発話が授業中生徒が教師に注意を喚起するために用いたとするならば、I’m sorry.で切り出すのは不適當で、remedy とはならない。なぜなら、相手を見下す横へいな印象を与えるからである。このような social context では“Excuse me.”の方が適切で remedy として機能するのである。しかしながら、もしこの発話が試験監督等の場面で、教師によって生徒に与えられる場合は“I’m sorry.”の方が適切であり remedy となるのである。(2)の場合、B が用いた“I’m sorry.”は相手の不運に対する同情の念を伝達しているのであって、社会規範の violation に対する remedy の機能を果しているのではない。しかし、もしこの場合、B が“Excuse me.”を用いたとすると、A が Rackham Grant を受けられなかったことに何らかの責任 (たとえば手続の仕方の指示が不適切だったなどの理由で) を感じての remedy として機能するのである。結局、Borkin and Reinhart は、“Excuse me.”

は基本的には聞き手の感情を和らげる remedy の働きをするが, “I’m sorry.” の方は必ずしも, Goffman の定義した remedy の働きばかりではなく, situation, context によってその働きが多様であると結論づけている。つまり “I’m sorry.” の方が “Excuse me.” よりも pragmatic range が広いと言えよう。

このように pragmatics とは人間の具体的言語行為を rule 化し体系づけて行く学問であることが理解できる。John R. Searle (1969) は人間の言語行為を rule governed behavior としてとらえ, pragmatics を “The study of the rules of language use.” と定義している。従ってこの定義を援用して CC を定義すると “The ability to use the rules of language use.” となろう。かくして CC は pragmatics がその理論的基盤となっていると言えるのである。Pragmatics は人間の具体的言語行為を扱い, つまり表層構造を記述の対象とするので, それだけ複雑度が大きくなり, また linguistics や communication の領域に広く係わりをもつので, 目下のところ独立した学問体系を作り上げるのは困難であるように思われる。これまでのところ pragmatics は semantics の一部として扱われてきているようであるが, J. R. Seale はじめ H. P. Grice, P. Cole, J. L. Morgan, B. Fraser 達によって C. Morris の trichotomy に従い, pragmatics を semantics から独立させようとする気運にあるように思われる。B. Fraser (1983) は pragmatics の domain を限定することによって独立した学問体系が構築されると示唆している。もし, これが実現すると CC が理論的に裏打ちされることになり, Chomsky の linguistic competence vs. linguistic performance の dichotomy の基盤は揺ぎ, 修正を迫られることになろう。R. M. Kempson (1977) も次のように述べその可能性を示唆している。

“if such a separation of semantics and pragmatics is indeed valid, then it is arguable that this distinction accords reasonably with the Chomskian distinction between competence and performance” (p. 73).

このように1970年代に入り CC が注目されたのに同調するかのよう

年 pragmatics の研究が盛んになり, language acquisition と深く係わり CC の理論背景となると同時に外国語教育への応用も活発に行われているのである。

IV. CC 獲得の原理

すでに述べたように Hymes は LC を包括する CC の存在を提案し, Chomsky の linguistic competence vs. linguistic performance の dichotomy に疑問を投げかけたが社会言語学者や応用言語学者の支持を受けている。社会言語学者 Roger T. Bell (1976) は次のように述べ, pragmatics の立場から Hymes の主張を支持している。

Communicative competence, building on the concept of linguistic competence, can be seen as the innate knowledge which permits the user of a language to create and comprehend utterances, to issue the communicative tokens of speech acts, in context. Such knowledge is, clearly, concerned with the level of discourse in which language operates as an open system in constant interaction with its environment, and is therefore an instance of pragmatic knowledge of which syntactic and semantic knowledge are a part. A specification of communicative competence can be recognized as an attempt to define not only how a user is able to judge grammaticality but also how he is able to recognize what is acceptable as a speech act in a social situation. (p. 207).

応用言語学者, C. B. Paulston & M. N. Bruder (1976) も “Linguistic competence forms part of communicative competence... (p. 58) と述べ CC が LC の上位範疇にあることを示唆し Hymes の主張を明らかに支持している。

Canale & Swain(1980)は CC が grammatical competence, socioling-

uistic competence, strategic competence の三つの部門から成り立つと述べ、Hymes の主張を一層鮮明にしている。

Communicative competence is composed minimally of grammatical competence, sociolinguistic competence, and communication strategies, or what we will refer to as strategic competence. (p. 27).

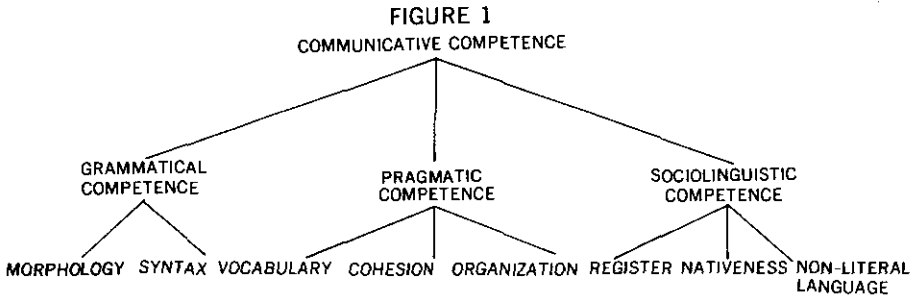
Canale & Swain はさらにこれら三つの部門をそれぞれ次のように規定している。

Grammatical competence. This type of competence will be understood to include knowledge of lexical items and of rules of morphology, syntax, sentence-grammar semantics, and phonology.

Sociolinguistic competence. This component is made up of two sets of rules: sociocultural rules of use and rules of discourse.

Strategic competence. This component will be made up of verbal and non-verbal communication strategies that may be called into action to compensate for breakdowns in communication due to performance variable or to insufficient competence. (pp. 29—30).

Bachman & Palmer (1982) は Canale & Swain (1980) の CC の下位範疇に修正を加え、次のような CC モデルを提案している。



Bachman & Palmer によるこの CC モデルは一段と systematic になり Hymes の考え方の妥当性を証明しているように思える。かくして、CC 獲得の原理に光が当てられることになるだろう。

CC が具体的に如何にして獲得されるか、その原理を明らかにする手がかりを与えてくれるのが、language acquisition の研究をしている心理言語学者達の臨床的研究成果である。1965年、N. Chomsky の *Aspects of the Theory of Syntax* が世に出るや、language acquisition に関心のある心理言語学者達は Chomsky の LC とそれが幼児にとって生得的なものであるという学説に注目した。D. McNeill, L. Bloom, Roger Brown 等が Chomsky の LC を支持し、Transformational C-model を用いて幼児の言語習得過程を記述したのである。幼児の 1 語文、2 語文の第 1 段階においては Transformational C-model は機能したのであるが、第 2 段階以後は機能しないことに気づき、Chomsky の Transformational C-model を批判したのが R. Brown (1973) である。たとえば、“Adam gave the doggie a bone.” という文は “Adam gave a bone to the doggie.” という文から変形規則によって生成されたものであるとする N. Chomsky の考え方を、実際の幼児の言語習得過程では逆であると実例を挙げて批判したのである (p. 233)。C. A. Kates (1980) によると、1960年代の末には M. Bowerman, D. Slobin, I. M. Schlesinger, R. Brown といった心理言語学者達は幼児の言語習得過程の記述に N. Chomsky の Transformational C-model を用いるのをやめ、generative semantic model の考え方に転向して行ったのである (p. 42)。次の図は generative semantic model を用いた I. M. Schlesinger と N. Chomsky の TGG-based mo-

del を用いた L. Bloom の考え方を対比したものである。

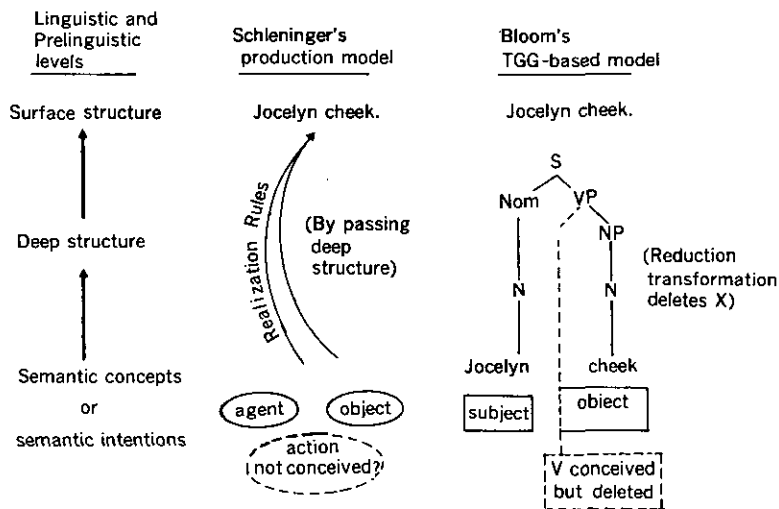


FIGURE 6-4 Two possible grammars for Stage I utterances.

—I. Taylor (1976) より

Schlesinger は agent とか object といった semantic concepts は linguistic knowledge (=linguistic competence) を反映するのではなくて、むしろそれは幼児の生得的、普遍的認知能力 (cognitive capacity) によって決定されるのだとして semantic concepts と surface structure の間に deep structure の存在を認めない。彼は deep structure の代わりに realization rules が存在すると主張する。そして幼児は semantic intention を surface structure へと結びつける realization rules を学ぶことによって言語を獲得するのであると述べている。つまり、幼児は認知能力の発達とともに概念を順序だてし、その概念に名詞とか動詞といった文法範疇と結びつける realization rules の獲得が言語習得につながるのであると主張する。従って Jocelyn という agent と cheek という object の間に action を示めず動詞 hurt という概念がまだ習得されていないとするのが、Schlesinger の立場であり、action を示めず動詞の概念が存在しているが、

消去 (delete) されているとするのが Chomsky の C-model を支持する Bloom の立場である。筆者は Schlesinger の立場を支持する。このように心理言語学者達は幼児の言語習得過程を臨床的に研究して行くにつれて、Chomsky の LC の存在そのものは認めるが、それが生得的であるとする考え方には反対しはじめている。むしろ、sensory-motor intelligence による認知能力が生得的であり、それによって幼児は言語を獲得して行くという Piaget (1980) の立場を支持するようになっていく。認知能力が発達して行くにつれて semantic concepts が育ち、それが言語の表層構造と結びつくためには Schlesinger のいう realization rules の知識が必要であり、そしてその知識こそがまさに CC 獲得の重要な要素になるものと考えられる。そして realization rules の知識は Bachman & Palmer の CC モデルに従うと、pragmatic competence(以下 PC と略)と socio-linguistic competence (以下 SC と略) の獲得の過程の中で習得されて行くという考え方が成立するであろう。

かつて N. Chomsky と共同で業績を挙げた心理学者 George Miller はその著書 *Language and Speech* (1981) の中で、幼児の言語習得過程において CC の方が LC よりも先に発達すると断言している。

When the first words appear, between the ages of 10 and 15 months, these gestures accompany them, vocalization is used more to attract attention than to communicate information. "Dada" may be uttered while looking at father, "mama" gesture, may be uttered for any desired object. In short, communicative competence begins to develop before linguistic competence. (p. 114). (下線は筆者による)

G. Miller がここで述べている CC の概念は Bachman & Palmer の CC モデルの PC と SC に相当するものであると考えるのが自然であろう。Miller の見解は幼児の言語習得過程では LC が生得的に存在しているのではなく、social context, social interaction の中でいわゆる PC と SC が発達し、それが LC を成長させる働きをしている事実を示唆するものであると言える。G. Miller 同様、Ton Van Der Geest (1975) もすでに CC が LC

に先行するという CC モデルの仮説を立てている。

1. Communicative competence
- ↓
2. Linguistic competence
- ↓
3. Communicative competence
- ↓
4. Performance (linguistic and communicative)

T. V. D. Geest のこの CC モデルでは CC と LC のレベルが混合しているように思われる。Bachman & Palmer の CC モデルに当てはめて考えると、第 1 段階の CC が PC と SC に相当し、第 3 段階の CC が Bachman & Palmer (1982) や Canale & Swain (1980) の CC のレベルに相当することになる。かくして、Bachman & Palmer の CC モデルが、一段と整理された elegant な CC モデルになっているように思われる。T. V. D. Geest の第 1 段階の CC が LC の発達のエネルギーとなり、その LC によってさらに強力な CC が発達するという考え方は、ある意味で PC, SC, GC (Grammatical competence) の三者が相互に作用し合って CC を発達させるという Bachman & Palmer の考え方を裏打ちすることになる。

幼児が CC を獲得する出発点は、まず PC の獲得にあると思われる。Language acquisition の研究者達がすでに明らかにしているように、幼児はその言語習得の第 1 段階では 1 語文を用いて伝達行為を始めるのであるが、幼児が用いる 1 語は必ずしも、語とそれが指示する事物との関係を表わすいわゆる semantics の機能ばかりでなく、pragmatics の機能ももつのである。この anecdotal evidence として筆者がアメリカでの研修生活の中で得た具体例を紹介してみよう。あるアメリカ人家庭に車で案内された時のことである。車の中には 3 人の子供達が同乗していて、一番年少の 1 歳半の男の子が突然、自分の家の前に駐車されているもう 1 台の車 (中には誰も乗っていない) を指し、“Grandma! Grandma!” と叫んだのである。一瞬、何処に彼の Grandma がいるのかと見廻わしたが、Grandma の姿は何処にも見当らなかつた。場面、状況から判断して、その男の子は “That’s my grandma’s car.” と筆者に report としよう

している意図が理解された。その男の子には“That’s my grandma’s car.”という文を表出する GC(=LC)がまだ獲得されていないために, Grandma という 1 語を用いて自分の意思の伝達を試みたのである。このようにして幼児の CC 獲得の前提となる GC, PC, SC の中でもとくに PC が中核になっていることが理解できる。そして PC が SC と相互作用し, また GC と相互作用しながら, CC が養われて行くものと考えられる。PC は前述の anecdotal evidence で明らかなように social context, social interaction の中で培われて行くのである。このことは Kenneth Pike (1960) が “Language Nucleation occurs within the social context.” と述べたことと符合する。K. Pike の Language Nucleation の概念はまさに CC の概念そのものであると言い得るのではなかろうか。

結局, CC 獲得の原理は social context, social interaction の中で聞き手と話し手の言語行為の交流の中に存在すると言えよう。

V. 英語教育への示唆

前章において CC 獲得の原理について考察したが, これが外国語としての英語教育に如何なる示唆を与えるか考えてみよう。

Bachman & Palmer (1982) の CC モデルは GC, PC, SC が相互に作用して CC が養われるモデルであると理解したが, 幼児の第 1 言語習得過程の場合は PC を起点にしてこれら三者が相互作用し, この回路を循環しながら CC が獲得されて行くものと考えられる。この CC モデルは図に表わすと次のようになる。

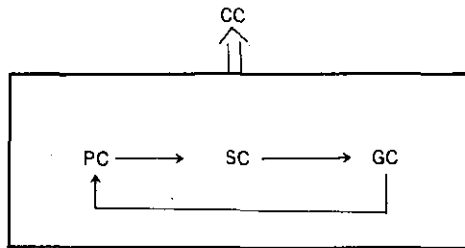


図 1

心理言語学者達は幼児の第1言語習得過程においてLCが発達する前にCC (Bachman & PalmerによればPC, SCに相当) が発達しはじめる」と指摘した。しかし、そうだからと言って、第2言語あるいは外国語としての英語教育においても、PC, SCを養う訓練をしてからGCを養う訓練をすべきかどうかについては議論の分れるところであろう。Savignon (1972) はCCを養う実験において同時にGCを養うことができた」と報告しているが、Canale & Swain (1980) はGCを養った上で、CCを養うことの重要性を主張している。彼らはHymesが“there are rules of grammar that would be useless without rules of language use,”と述べた表現を利用して、“we feel that there are rules of language use that would be useless without rules of grammar,”と述べ、GCに裏打ちされたCCを養うことを強調している。Rivers, Paulston, Bruder等、外国語としての英語教育の研究者達もCanale & Swainと同じ立場をとっている。自然言語学習環境に近い豊富なexposure(目標言語接触時間)とsocial interactionが保証される場合は、図1のようなCC獲得モデルが有効に機能するであろうが、教室という大きな制約を受けている不自然言語学習環境で展開される学校教育の中の英語指導においては、LC、つまりGCを養う訓練をしてからPC, SCを養う訓練をする方が能率的であると考えられる。従って筆者もCanale & Swainの立場を支持して、外国語としての英語教育におけるCC獲得のモデルを次のように提案する。

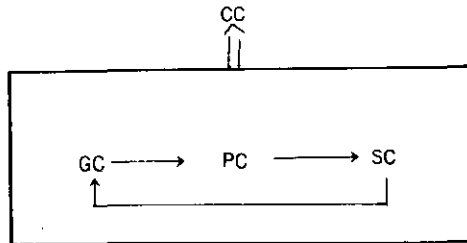


図2

Canale & Swain が強調しているように、GC を養う訓練によって、まず grammaticality を判断する力をつけさせ、PC, SC, を養う訓練によって、発話が grammatical ではあるが、acceptable であるか否かを判断できる力をつけさせることが重要である。つまり“the cheese the rat the cat the dog saw chased ate was green.” が grammatical ではあるが acceptable ではないと判断でき、“the dog saw the cat that chased the rat that ate the cheese that was green.” が grammatical であり、かつ acceptable であると判断できる能力を養うことが重要なのである。

このような立場に立つ訓練の方法としては、Rivers (1973) の pseudo-communication drill を橋渡しとして用いる skill-getting から skill-using, つまり GC (=LC) 獲得の drill から CC を獲得する drill のモデル及び Paulston & Bruder (1976) の Meaningful Drill を橋渡しとする GC 獲得の drill から CC を獲得する drill のモデルが参考になる。とくに日本の学校教育の中での英語教育においては、Paulston & Bruder (1976) のモデルが有効に働くように思われるので簡単に紹介してみよう。

- (1) A Mechanical Drill (complete control of the response)
- (2) A Meaningful Drill (comprehension type questions and answers)
- (3) A Communicative Drill (the free transfer of learned language patterns to appropriate situation)

(1)の drill は徹底した repetition drill や substitution drill を意味し、いわゆる pattern practice であり、学習者の類推力を養うことに主眼をおく。(2)の drill では学習者が drill している言語表現の意味を十分理解していることが前提になる。たとえば、T: What color is Tom's sweater? S: It's red. のように教師が現実場面ですでに情報をもっているのに生徒に問いかけ、生徒は教師もすでに情報をもっていることを知りながらお互いに交わす言語行為であり、artificial ではあるが、communicative drill へと橋渡しする重要な drill である。(3)の drill は学習者に(1)(2)の段階で習得した言語表現を用いて現実場面での新しい情報を伝達させる訓練であり、発問者は実際に未知の情報を求め、応答は全く応答者の自由意志に

もとずいてなされる。たとえば、“Do you have a date for Saturday night?”という問いかけに対する応答は真の communicative response になるというのである。

Communicative approach を支持する多くの言語学者、外国語教育研究者達が示唆するように究極的には、CC は authentic な social context, social interaction の中でしか生まれてこないと断言できよう。従って、真に CC を養う英語教育を志向するならば、social context, social interaction を積極的に英語指導の実践の中にとり入れた CC 獲得のための drill が必要である。Rivers (1973) や Paulston & Bruder (1976) の中に示められている具体例のほか、W. Littlewood (1981) 等の提案している教室内で実施可能な role play や social interaction activities 等を取り入れた教授法の変革が望まれる。また具体的指導展開の中では、最近よく強調されているように学習者中心の英語学習環境を整えることが大切である。必要にせまられて学習しなければならないような環境づくりをしてやること。それは学習の動機づけとなり、学習者の創造性を養うことになる。英語指導の言語活動の中では、学習者からつとめて創造的な発話を導き出すことが大切であり、その際、global errors の矯正はするが、local errors はその都度、いちいち指摘しないで、学習者がすでに獲得している GC を用いて学習者自ら自由に variation を考え作り出せるような場面設定が必要である。このような訓練を通して、はじめて CC の発達が促進されるのである。

さて、CC 獲得のためには、これまで述べてきたような教授法の変革に加え、PC, SC を養い、GC から CC へのギャップをうめるような機能的教材の開発、PC, SC 獲得の訓練が保証される十分な exposure (機能的英語との接触時間) の確保、そして学習者の CC 獲得を十分助けることができる程度の英語の CC、つまり学習者の GC に対応する CC 獲得の訓練を担当するだけの英語の駆動力をもつ有能な英語教師の供給が保証されなければならない。

VI. むすび

Dell Hymes の CC 発達に関する考察は幼児の母国語習得過程の場合を

とりあげたものであるが、その CC 獲得の原理は本稿で考察したように、基本的には外国語としての英語の CC 獲得の原理でもあると理解される。学習者の英語運用能力を向上させる英語教育を志向するのであれば、英語の CC 獲得の原理を基盤とした指導体制を確立することが必要である。つまり、英語学習者の CC を養うためには、教師はまず学習者中心の英語指導体制を作らなければならない。学習者の獲得した GC の発達段階に応じて、学習者の生活経験に基づいた興味と関心の高いものを言語活動の媒体として用い、how to say から what to say の訓練に重点を移す指導が必要であろう。CC 獲得訓練の段階では、教師は自らが英語学習活動の中心になることを、つとめて避け、教室の中では、adviser, counselor としての役割を果し、言語活動の協力者として学習者と共に学ぶ姿勢をもって指導に当たるとき、学習者の英語 CC 獲得が促進されるであろう。

参考文献

- Allen, E. D. (1975). *Communicative Competence*. In Series On Languages & Linguistics, No. 15, Center for Applied Linguistics.
- Austin, J. L. (1962). *How to Do Things with Words*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.
- Bachman, L. F. & A. S. Palmer. (1982). "The Construct Validation of Some Components of Communicative Proficiency," *TESOL Quarterly* Vol. 16, No. 4, 449-477.
- Borkin, A. & S. M. Reinhart. (1978). "Excuse Me & I'm Sorry," *TESOL Quarterly* Vol. 12, No. 1. 57-69.
- Brown, R. (1973). *A First Language*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Canale, M. (1983). "From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy," In J. Richards & R. Schmidt(eds), *Language and Communication*. Longman.
- Canale, M. & M. Swain. (1980). (Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing," *Applied Linguistics*, Vol. 1, Oxford: Clarendon Press. 1-47.
- Chomsky, N. (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Cole, P.(ed), (1978). *Syntax and Semantics 9: Pragmatics*. New York:

- Academic Press.
- Cole, P. & J. L. Morgan(eds), (1975). *Syntax and Semantics, Speech Acts*, Vol. 3. New York: Academic Press.
- Ervin-Tripp, S. (1976). "Is Sybil there? the Structure of Some American English Directives," *Language in Society*. 5, 25-66.
- Fraser, B. (1978). "Acquiring Social Competence in a Second Language," *RELC Journal* 9, 1-20.
- _____ (1983). "The Domain of Pragmatics," In J. Richards & R. Schmidt(eds), *Language and Communication*. Longman, 29-60.
- Geest, T. V. D. (1975). *Some Aspects of Communicative Competence and Their Implications for Language Acquisition*. Amsterdam: Koninklijke Van Gorcum & Comp. B. V.
- Goffman, E. (1971). *Relation in Public*. New York, Basic Books, inc.
- Grice, H. P. (1975). "Logic and Conversation," In P. Cole and J. L. Morgan, (eds), *Syntax and Semantics: Speech Acts*. Vol. 3, New York: Academic Press, 41-58.
- Hymes, D. (1972). "On Communicative Competence," In J. B. Pride & J. Holmes(eds), *Sociolinguistics*. Penguin, 269-293.
- Jakobovits, L. A. (1969). "A Functional Approach to the Assessment of Language Skills," *Journal of English as a Second Language*. Vol. IV. No. 2, 63-76.
- Kates, C. A. (1980). *Pragmatics and Semantics*. Ithaca: Cornell University Press.
- Kempson, R. M. (1977). *Semantic Theory*. London: Cambridge University Press.
- Kettering, J. C. (1975). *Developing Communicative Competence: Interaction Activities in English as a Second Language*, Center for International Studies, University of Pittsburgh.
- Littlewood, W. (1981). *Communicative Language Teaching*. London: Cambridge University press.
- Miller, G. A. (1981). *Language and Speech*. San Francisco: W. H. Freeman and Company.
- Morris, C. (1938). *Foundations of the Theory of Signs*. Chicago: University of Chicago Press.
- Paulston, C. B. (1974). "Linguistic and Communicative Competence,"

- TESOL Quarterly Vol. 8, No. 4, 347-362.
- Paulston, C. B. & M. N. Bruder. (1976). *Teaching English as a Second Language*. Cambridge, Mass.: Winthrop Publishers, Inc.
- Piattelli-Palmarini(ed), (1980). *Language and Learning: The Debate between Jean Piaget and Noam Chomsky*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Pike, K. (1960). "Nucleation," MLJ Vol. XLIV, No. 7, 291-295.
- Richards, J. C. & R. W. Schmidt(eds), (1983). *Language and Communication*. London: Longman.
- Rivers, W. M. (1973). "From Linguistic Competence to Communicative Competence," TESOL Quarterly Vol. 7, No. 1.
- Savignon, S. J. (1972). *Communicative Competence: An Experiment in Foreign Language Teaching*. Philadelphia: The Center For Curriculum Development, Inc.
- Savignon, S. J. (1972). *Communicative Competence: An Experiment in Foreign Language Teaching*. Philadelphia: The Center For Curriculum Development, Inc.
- Schmidt, R. W. & J. C. Richards. (1980). "Speech Acts and Second Language Learning," Applied Linguistics, Vol. 1, No. 2, 129-157.
- Searle, J. R. (1969). *Speech Acts*. London: Cambridge University Press.
- _____ (1976). "A Classification of Illocutionary Acts," Language in Society 5, 1-23.
- Slobin, D. (1967). *A Field Manual for Cross-Cultural Study of Acquisition of Communicative Competence*. Berkeley: University of California Bookstore.
- Taylor, I. (1976). *Introduction to Psycholinguistics*. New York: Holt, Rinehart & Winston.